

カヌーによる知床半島北岸遺跡調査

山田 俊幸

〒060 札幌市北区北10条西8丁目 北海道大学理学部動物染色体研究施設

知床半島北岸には、オホーツク期の遺跡の立地しうる所がいくつかみられる。しかし、テッパンベツ川以東に道はなく、断崖が連続し、これを踏査することはむずかしい。したがってこれまでに一部（テッパンベツ川以西と知床半島先端部）を除いて調査は行われていない。そこで我々はカヌーを使って、テッパンベツ川以東、半島先端部まで（約20km）を調査し、遺跡をさがすことにした。

新しく発見された遺跡は1ヶ所であったがカヌーを使って知床半島北岸に行くという貴重な体験ができたので、その模様について報告してみたい。

メンバー：天野哲也・小野裕子

（北大文学部北方文化研究施設）

山田俊幸

（北大理学部動物染色体研究施設）

日程：昭和56年7月21日～26日

装備：カヌー（ピラニア、英国製、全長5m、重量30kg、FRP製の丸木舟型、いわゆるカナディアンカヌーである。本来静水用であり、海での使用にあたっては、波がかかり、沈没するおそれがあったが、荷物をたくさん乗せられる利点があるので、これを使った。）

車（1968年型、トヨタ、ランドクルーザー）
キャンプ用具

第1日（霧雨）札幌→斜里

午前9時30分、ランドクルーザーにカヌーを積んで札幌出発。旭川で昼食。北見で非常食用の味噌パンを捜し求めるが、なかなか見つからず、何軒めかの店でわざわざ問屋から、「大西製菓の味噌パン」をとりよせてもらう。美幌で夕食をとり、一路斜里へ、と思ったが、途中でガソリンが切れ

かかっているのに気づく、とても斜里までもちそうもなく、時刻は午後9時をまわっている。今夜は車の中で眠ろうなどと言ってはみたが、しかたなく清里で、もう終わっているスタンドにたのんでガソリンを入れてもらった。午後10時15分、斜里北方文化研究施設分室到着。

第2日（雨のち曇）斜里→タキノ川北尾根北側

午前8時に起床、週間天気予報はあまり思わしくないようだが、決行することに決定。午後0時20分、ランドクルーザーで斜里を出発し、宇登呂でサントリーホワイトを買い、岩尾別、カムイワッカ川を無事通過し、午後2時、知床大橋に着く。あいにく霧が濃く、ほとんど何も見えない。それにもめげずに記念撮影をすませて、いよいよ林道に入る。

午後2時45分、ポンベツの手前でヒッチハイクに会った。札幌医大のワンダーフォーゲル部員で色気はまったく無く、男ばかり5人で、聞くところによると、テッパンベツ川沿いに半島横断を試みるそうである。これを乗せる。人間8人、大量の荷物、カヌーを積まれた1968年型ランドクルーザーはさすがに重そう。老体にムチ打って石ころだらけの道を走る姿が痛々しい。午後3時15分、なんとかテッパンベツ川にたどり着き、ここでワンダーフォーゲル部員とわかれた。我々はカヌーを海に浮かべ、行動に移る。ランドクルーザーは、帰ってくるまでテッパンベツの番屋に預けることにした。

まずカヌーには2人乗り、荷物を積んで航行し、残る1人は、遺跡を捜しながら海岸を歩いて行くことにする。途中、歩行不可能な場所（断崖がせり出して、浜がなく、泳がねばならない場所）では、カヌーがその先で荷物をおろして、歩いている1人を迎えに戻るといった形をとる予定。最初カ

ヌーには天野と山田が乗り、小野は歩行。午後3時40分出航。カヌーはキャンプ用具、3人分のリュック等を積んで、なおかつ2人乗ってもきわめて安定であり、心配された波もなく快調なすべり出しをみせた。この日のために小樽運河で積んできた練習がものをいい、歩くのよりはるかに速い。沖合150mぐらいのところを海岸線と平行に走る。しかし海上から見る限り、遺跡の立地しうる場所はないよう。

タキノ川北側の尾根が海にせり出し、歩行不可能なので、その先で荷物をおろして小野を迎えに返ることにする。カヌーを大きな岩の横に着け、荷おろしにかかるが、岩場には波があり悪戦苦闘する。なんとか荷物はおろせたが、大部分水をかぶってしまい、これからはカヌーは岩場ではなく、石浜にあげた方がよいことを悟った。午後5時45分、小野を迎えにタキノ川へカヌーで往復し、荷

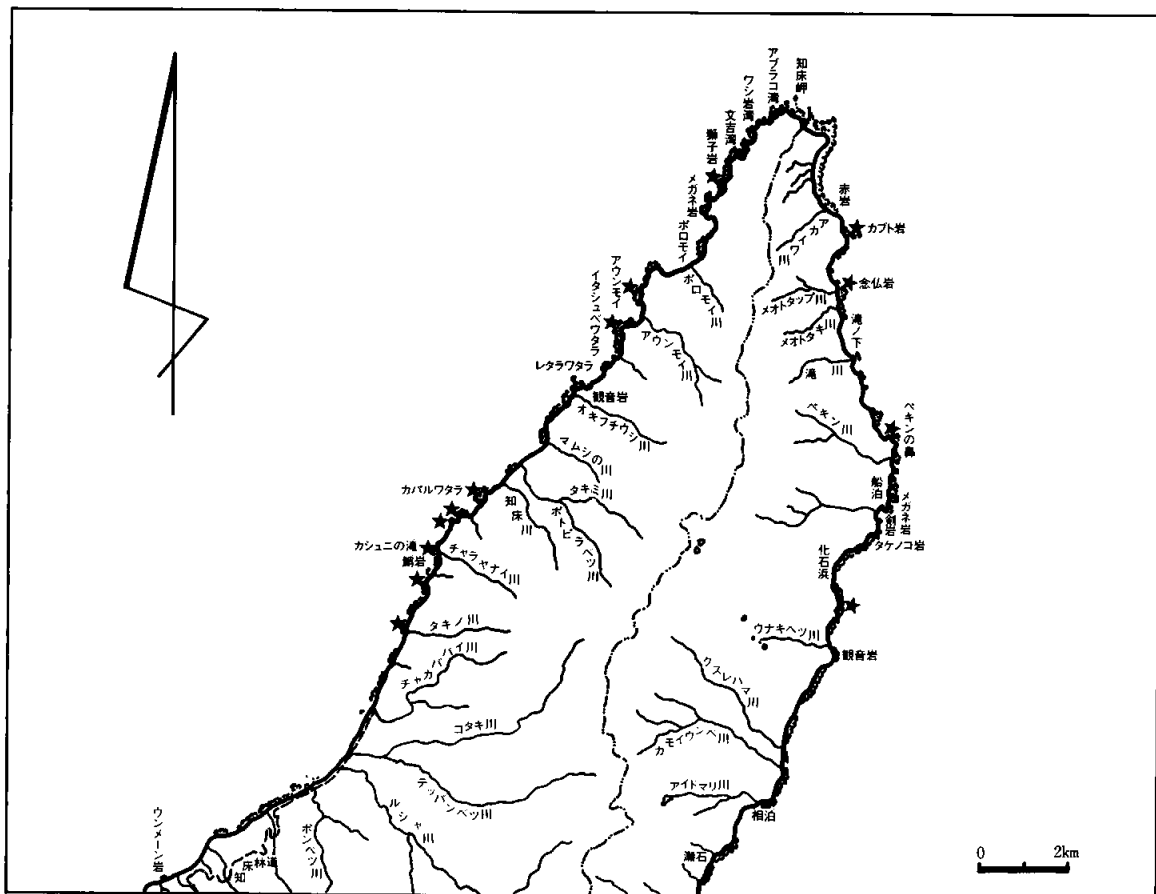
揚げ地点にテントを張った。夕食前に釣をしたがなにも釣れず、逆に仕掛を3つも失う。

カヌーはまずまずであり、この調子でこの先も行けそうだ。なお、今日の行程には、遺跡のありそうな場所はなかったため調査は、しなかった。

第3日(曇のち晴) タキノ川北尾根北側→アウンモイ

昨日は、2人はカヌー、1人は歩行という形態をとったが、今日の行程は、地図上歩行不能なポイントが多いため、初めから3人もカヌーに乗り、遺跡のありそうな場所を海上からさがして、そのつど上陸して調査することにする。午前10時8分、出発。カヌーは3人乗っても全く大丈夫、沖合200mを順調に進む。海は静かであった。

峭岩沖、カシュニの滝沖、カバルワタラ沖、知床川沖を通過し、午前11時25分、ポトピラベツ川



★は徒歩不可能な箇所

右岸に上陸した。昨日の教訓にしたがって石浜にカヌーを乗りあげたが、小野は上陸に失敗し、海中に尻もちをついて、服を濡らしてしまった。昼食後遺跡さがしにかかるが、ポトピラベツ川右岸台地上には灌木が茂り、左岸台地上は草地で、大きな石がゴロゴロしていて、結局遺跡はみつからなかった。午後1時45分出発。沖合から陸地を眺め遺跡のありそうな場所をさがしながら進んだ。

午後2時18分、天野が独特なカンでオキッチウシ川左岸に遺跡の気配を感じ、番屋の船つき場に着岸する。天野が単身上陸して左岸台地を調査したが収穫はなかった。残念であった。番屋のおばさんに驚嘆の目をもって迎えられ、あまりの突飛さを感じられる。お茶をすすめられたが先を急ぐ身なので遠慮させていただいた。午後2時30分出発。レタラワタラの岩礁は沖に出てかわず。沖はうねりが高く、岩の上にはウミネコ、カモメが多数たむろしていた。イタシュベワタラの岩礁はまん中をつつ切る。午後3時50分、アウンモイの入り江を横切り番屋の近くに上陸し、テントを張った。ここは入り江であるが、背後にすぐ断崖がせまり、遺跡はありそうもない。断崖の上にはあるかもしれないが登るのには急峻で、草木が茂い繁り、断念した。ここでも夕食前に釣をしたが収穫はなかった。

夕食後、番屋に呼ばれて風呂をもらった。鉄板を組んだ大きな四角い風呂で、うす暗い電燈が最果を思わせるようであった。そのあと番屋の人たちとビールをくみ交した。この24号番屋には、夏季には普段30名近い人がいるそうであるが、この時はお盆休みで留守番の人が5・6人いるだけだった。ここでは電気は背後の崖から滝になって落ちる川の水を利用して発電機をまわしておこしているそうである。しかし一番印象深かったのは便所で、横に3つ並んだ便所の下を小さな川が勢いよく流れている、いわば天然の水洗便所で、非常に清潔であった。

第4日 (雨のち曇のち雨) アウンモイ→文吉湾

午前7時に起床して海の様子を見てみたが、波が高い様子であった。一応今日中に文吉湾をめざすことにするが、今日の行程はポロモイを除いて岩礁地帯が続くため、この波が気にかかった。午

前9時50分出発。アウンモイの湾を出たあたりから波高し。カヌーの中にしぶきが入りはじめた。岩場では白波が砕け、うねりが強い。このままでは危険と判断して午前10時8分、岩礁中の入り江に急遽避難した。今後の処置を検討するが、カヌーの操縦性・荷重の関係等を考えて、結局天野が1人でカヌーで岩礁をまわり、小野、山田は徒歩で岩礁づたいに進み、ポロモイ南端で合流することにした。午前10時15分、それぞれ出発。カヌーは波にもまれていた。小野と山田は、ひたすら天野の無事を祈りつつ歩く。岩礁は意外と平坦であったが、入江が大きく、迂回するのに骨が折れた。途中1ヶ所せり出した岩を高巻したが泳ぐ場所はなかった。午前11時、全員無事にポロモイ南端で合流し、胸をなでおろす。ここからまた3人カヌーに乗り、ポロモイをつつ切って午前11時55分、ポロモイ26号番屋について。

昼食は番屋でとった。あら汁とさし身の差入があった。文句なくうまかった。なおこの地形もアウンモイ同様であったため、遺跡の調査はやめにした。

天候はいいかかわらず思わしくなく、波も高い。これから先文吉湾までカヌーで行くかどうか意見が分かれ、カヌーで強行するという天野と、やめたほうがいいという山田の間でしばし口論が続いたが、最後にはカヌーをあきらめることにした。そこで天野は磯づたいに文吉湾まで歩いて行くことにし、小野と山田はカヌーと荷物を番屋の船で文吉湾まで運んでもらうことにした。天野は一足先に文吉湾へ向かい、小野と山田は午後4時10分、ポロモイを出発した。途中海は荒れて、番屋の船も相当うねりにもまれた。午後4時18分、沖合から磯づたいに歩く天野を発見し、その足の速いのおどろかされる。午後4時30分、船は文吉湾に着いた。天野も一足おくれて文吉湾着。

天野の話では、途中ヒザまで海中につかるところが3ヶ所、高巻1ヶ所であったそうだ。シシ岩北側から台地上にあがって、この岬上で待望の遺跡(堅穴住居のあとらしい窪地で、5m×6mの長方形、深さは0.4mほど)を発見した。歩いたかがあった。

とにかく目的地の文吉湾に着いた。最終行程でカヌーを放棄してしまったが、天候さえ良ければ海は静かで、カヌーを使つての知床調査が可能な

ことが実証された。

知床半島北岸の地形は、浜がせまく、浜のすぐうしろには大なり小なり断崖が連なっており、今回発見された遺跡もシシ岩北側岬の台地上でみつかった。それまでの行程でも（アウンモイ、ポロモイ等）断崖に登れば遺跡が見つかる可能性がある。したがってこれからは山登りの装備も必要になってくるだろう。

文吉湾でも番屋で食事、風呂をもらい、泊めてもらった。

なお、カヌー乗船時間は、

天野 6時間23分

山田 5時間48分

小野 3時間53分 であった。

第5日（曇のち快晴） 文吉湾→斜里

午前5時52分起床、午前6時に朝食、番屋の人たちは、もう一仕事終わっていた。この日、午前中時間があったので、天野は昨日みつけた堅穴跡を調査に行った。遺跡の周辺は、草が茂っていて精査はできなかつたけれど、地形的にみて複数戸あったとしても、数はそんなに多くない様子だったという。小野、山田は文吉湾から知床岬先端までに分布する既知の遺跡を確認に出かけた。慶吉湾北側、ワシ岩湾の斜面の中腹の「くま送り場」（昔、オロッコがクマを殺したあと、頭部を安置した場所、頭骸骨はすでに撤去されていて、現在そこにはない）を確認。灯台用の発電所建物の手前でオホーツク期のものと思われる堅穴跡（12m×12m、深さ0.4mぐらい）を確認。午前8時10分、知床燈台着。燈台は白黒のタイル張りの美しいものであった。海上はるかに国後島を望む。燈台下の段丘上に堅穴のあとらしき窪みを認めた。

午前10時30分、番屋で昼食をもらう。天気は昨日と打ってかわって快晴、海は静かであった。午後12時50分、いよいよ帰路につく、帰りは知床水産マス集荷船「第18知床丸」に、カヌー、荷物をすべて積んでもらい、文吉湾を発つ。集荷船は、各番屋から収穫のマスを集めながら、宇登呂に向かう。午後1時38分、テッパンベツ着。天野はここで集荷船を降り、番屋に預けてあるランドクルーザーに乗って宇登呂へ。小野、山田は宇登呂港でカヌーを降ろし、天野と合流することにした。カヌーで3日がかりの行程を集荷船は1時間で走

破してしまった。午後3時21分、集荷船、宇登呂着。直後、天野がランドクルーザーで宇登呂港に着いた。

帰り仕度を整え、宇登呂の「ちかる」で休憩。子グマやネコの「トム」と遊ぶ。午後4時45分、宇登呂発。午後5時50分、斜里着。

無事斜里に戻ることができてよかった。とにかく知床岬先端まで行くことができて満足であった。

第6日（晴のち曇） 斜里→札幌

午前8時15分斜里発。旭川で昼食をとり午後6時10分、札幌着。ランドクルーザーの走行距離は965.7kmであった。

以上、簡単にまとめてみたが、今回の調査で2つのことがわかった。すなわち

- ①知床半島北岸におけるオホーツク文化の遺跡（堅穴住居あと）は、以前から確認されていた、ルシャ川付近と、半島先端部とその付近に偏在し、その途中には、確認できた範囲ではわずかであり、もしもっと詳しく調査するとすれば、大がかりな装備が必要であろう。
- ②カヌーは、海さえ静かなら、このような陸路のない場合の調査に有効な手段となり得る。しかし、状況によっては危険をとまなうので、特に天候、風向、潮流等について、あらかじめ十分に調べておくことが必要である。

この調査で知床のすばらしさを改めて感じた。この自然がいつまでも変わらずに残って欲しいと思う。最後に、食事、風呂、宿泊、船での運搬等、各番屋の人たちに大変お世話になった。この方々に心から感謝したい。